

高齢者「残薬」の悪循環



大阪府忠岡町の女性宅で見つかった残薬の一部。薬剤師が保管し、使用期限前ものは再活用した

「年475億円分」の推計も

高齢者宅から薬が大量に見つかる事例が目立っている。「残薬」と呼ばれ、多種類を処方された場合など適切に服用できず、症状の悪化でさらに薬が増える悪循環もある。年400億円を超えるとの推計もあり、薬剤師が薬を整理し、医師に処方薬を減らすよう求める試みが広がる。

大阪府忠岡町の女性(78)宅を訪れた薬剤師の井上龍介さん(39)は、台所のフックにかかった10袋以上のシジ袋を見つけた。「ちよっと見せて」。中は全部、薬だった。

胃薬や血圧を下げる薬、血糖値を下げる薬、睡眠薬……。10年ほど前の日付の袋に入った軟膏もあり、冷蔵庫にインスリンの注射薬が入れっぱなしだった。錠剤は1千錠を超え、価格に換算すると14万円超にのぼった。

井上さんは昨夏、女性を

多種の処方▼飲みきれず▼症状改善せず▼増薬

担当するケアマネジャー(上)麻紀さん(39)の相談を受けた。上さんによると、女性は糖尿病や狭心症などで3病院に通い、15種類の薬を処方されていた。適切に服用しなかったため糖尿病は改善せず、医師がさらに薬を増やし、残薬が増える悪循環に陥っていた。

「高齢で認知能力が落ちている上、3人の主治医が処方する薬が多く、自己管理が難しかったのだろう。井上さんはみる。

残薬は使用期限前、保存状態が良ければ使える。井上さんはそうした薬を選び、曜日別の袋に薬を入れ、「服薬カレンダー」に入れ、台所の壁にかけた。約3カ月後、寝室から約25万円分の薬も見つかり、薬の種類を減らすため主治医の一人に相談し、ビタミン剤の処方を受けてもらっ

た。在宅患者や医療関係者に薬の扱い方を教える一般社団法人「ライフハッピーウエル」(大阪府豊中市)の福井繁雄代表理事によると、1日3食分の薬を処方されながら食事が1日1食で薬がたまる高齢者や、複数の薬を処方され「何をどう飲むか」が分からなくなると90日分も残薬があった。

た糖尿病患者などの事例が各地から報告されている。日本薬剤師会は2007年、薬剤師がケアを統括する在宅患者812人の残薬を調査。患者の4割超に「飲み残し」「飲み忘れ」があり、1人あたり1カ月で3220円分が服用されていなかった。金額ベースでは処方された薬全体の24%にあたり、厚労省がまとめた75歳以上の患者の薬剤費から推計すると、残薬の年総額は475億円になるとい

持ち込み、薬剤師が整理

残薬を減らすため厚生労働省は「踏み込みかが検討課題」と話す。昨年、薬剤師が受け取る調剤報酬の規定を改訂した。「薬剤服用歴管理指導料」の条件の一つに、薬の飲み残しがないか調剤前に確かめることを盛り込んだ。

ただ、店頭で薬剤師が口頭で尋ねるのが大半で、厚労省医療課は「家まで行って服薬を管理するなど、薬剤師がどれだけ在宅医療に

各地では対策が始まっている。福岡市薬剤師会は「節薬バッグ運動」を進める。市内31薬局で12年、バッグ1600枚を患者に配って残薬の持ち込みを呼びかけたところ、約3カ月で患者252人

が約80万円相当の残薬を持ってきた。薬剤師が整理し、安全性が確認された約70万円分の薬を使って

多さや煩雑さ理由絡み合う

亀井美和子・日本大薬学部教授(社会学)の話。残薬の理由は複雑だ。高齢者が一人暮らしで相談相手がないことや、処方された薬の多さ、使用法の煩雑さなどが絡まっている。結果的に治療効果が得られず症状が悪化し、不要な薬を追加されることもある。かかりつけの薬局などに相談し、薬の種類や飲み方を見直してほしい。

医師で日本在宅薬学会の狭間研至理事長は「薬を飲んでいない患者に、飲んだことを前提に対応しているわけだから、治療自体が崩壊する。薬代も無駄になる」と話す。薬の処方が必要以上に膨らめば、社会の高齢化が進むなかで医療費の拡大も危惧されるとい

福岡「節薬バッグ運動」

13年には参加薬局を約650薬局に拡大。小柳香織担当理事は「残薬は調べると想像以上。今後、も飲み残しを持ち込んでもらい、残薬を減らしたい」と話す。

高知県でも昨年10月、県内72薬局で残薬を患者に持ち込んでもらう取り組みを始めた。県医事業務課は「残薬の整理だけでは原因は分からず、薬剤師が向かい合って解決のきっかけにしたい」としている。(錦光山雅子)